

がん細胞転移、抑制効果

弘前大・西塚准教授、青森産産技研究チーム発見

弘前大農学生命科学部食料資源学科の西塚誠准教授(兼学)と、青森県産産技センター野菜研究所(六戸町)による研究チームがニンニクに含まれる硫黄化合物「シクロアリイン」に、がん細胞が周囲に広がったり、転移しようとしたりする動きを抑制する効果があることを発見し、学術誌に発表した。西塚准教授は、シクロアリインを活用した新薬の開発につながる可能性があると、して「食べるだけではない、ニンニクの新たな可能性を見いだしたい」と力を込める。

(金澤千優希)

シクロアリインは、ニンニクやタマネギに含まれる成分。血液中の中性脂肪やコレステロールを低下させるほか、代謝を良くするなど、作用があり、これらの食材を食べると「血液がさらさらになる」という一般的なイメージの元になっている。黒ニンニクとして加工すると、含有量が増えるという。

西塚准教授は、がん細胞が転移する仕組みや、疾患の予防・治療につながる食品成分の探索などを研究の柱とする中、ニンニクに着目。野菜研究所の協力を得て研究を進めてきた。



西塚誠准教授

今回明らかになったのは、シクロアリインが、がん細胞の転移初期に細胞形態を変化させる動き(上皮間葉転換)と、周りの組織に広がる能力(浸潤能)を抑制するという新たな生理機能。西塚准教授は、今後シクロアリインが作用するメカニズムなどをさらに解明し、安全性や有効性を確認できれば、創薬に大きく貢献できる」との青写真を

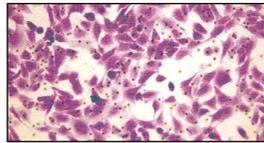
新薬の開発期待

描く。

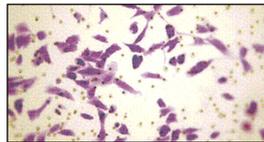
ニンニクの新たな可能性を、関係者も歓迎する。県黒にんにく協会(佐藤裕一理事長)は、今月6日、八戸市内で西塚准教授らを講師

に招いたセミナーを開催し、今回の研究内容に理解を深めた。佐藤理事長は、ニンニクの謎がまた一つ解明され、未来が広がっていると感じる。難しく考えず、

多くの人に「健康に良いもの」として気軽に食べてもらいたい」と食文化の広がりにも期待する。西塚准教授は、がん細胞だけでなく、関節リウマチの炎症抑制にもニンニクの含有成分が作用する可能性があると、して研究を続けており、「今まで食品として注目されてきたが、成分が創薬につながる可能性が見えてきた。産学官が連携し、青森全体で盛り上げていけたら」と意気込んだ。



シクロアリインなし



シクロアリインあり

(紫色の細胞が浸潤した細胞)

シクロアリインを添加すると、がん細胞の浸潤能が抑制されることを表す実験データ(西塚准教授提供)



黒ニンニク加工業者などに、シクロアリインの新たな生理機能について発表する西塚誠准教授(6日、八戸市)

この画像は、当該ページに限って”デーリー東北”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。